

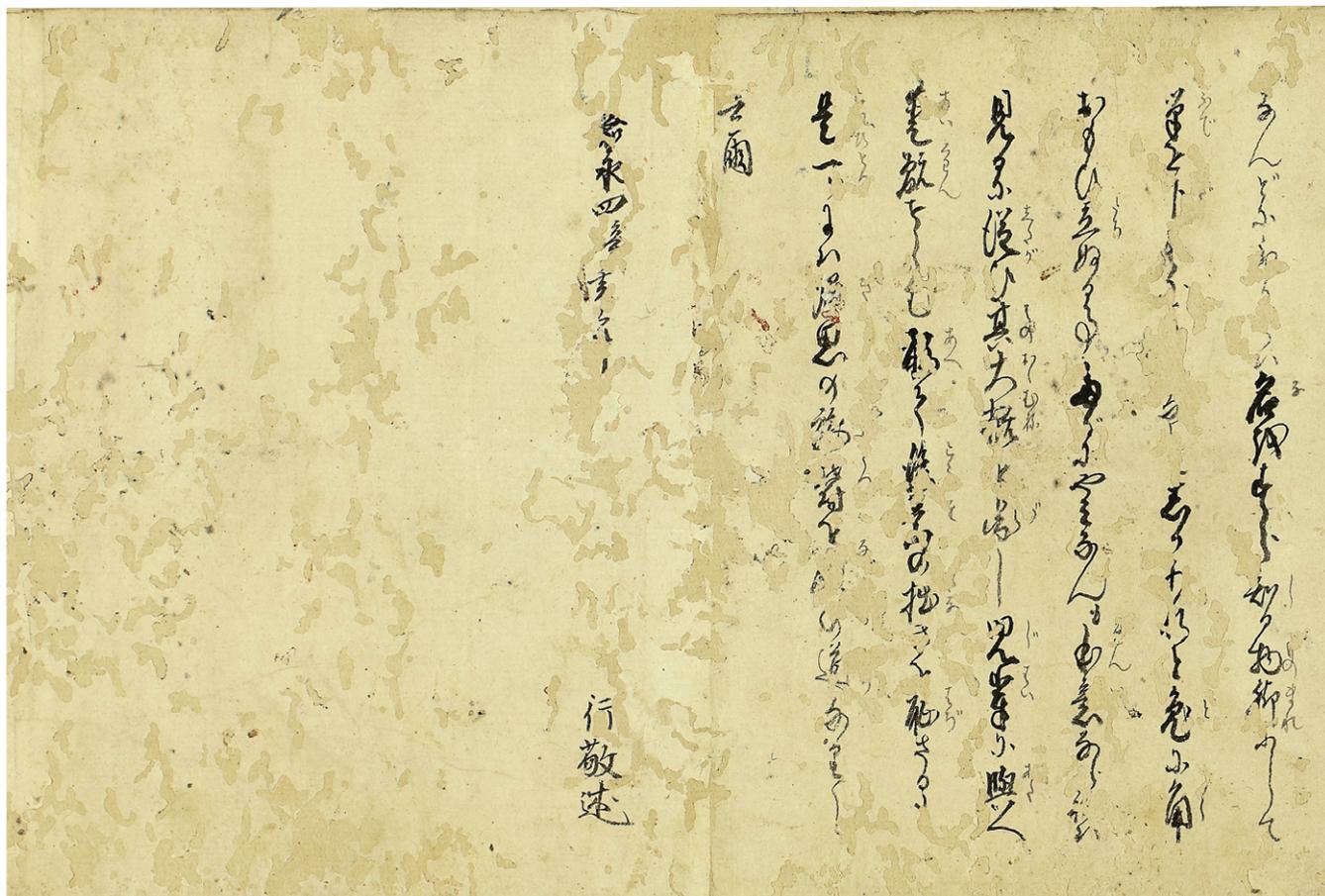
上月行敬自筆『琉球人行粧』卷一 卷子本1巻 本紙15.5×501.6cm

2020年2月末、本絵引の校正の最終段階で、長らく行方不明であった上月行敬（1795-1861）の自筆の『琉球人行粧』巻一の存在が確認された。『国際稀覯本フェア2020 日本の古書 世界の古書』（ABAJ日本古書籍商協会、2020年2月）に掲載されており、掲載図版を見ただけでも、筆跡あるいは絵の色使いなどから上月の自筆であることが直感できた。今回出品者の御好意により現物確認を行うとともにその図版を本書に収録することができた。

本絵巻（以下、自筆本）は卷子本1巻、植物模様を織り出した緑色の表紙が付けられ、「琉球人供物行列ノ圖」と墨書された杉箱に収められている。本紙（特に巻頭）には虫損の跡が夥しい。保存状態が悪かったという点は、鹿児島大学附属図書館の巻二・三（以下、鹿大原本）と共通している。装丁が現在の形になったのは戦前ではなく、戦後（昭和40年代以降か）のことと推察する。虫損の激しさ

は自筆本および鹿大原本の計3巻がある時点まで南国鹿児島に存在していたことを物語っているのではなかろうか。

自筆本と、鹿児島県立図書館所蔵の写本（以下、県図写本）とを比較してみると、構図に変わりはないものの、県図写本の限界も見えてくる。自筆本では見物座敷の前を通る酒屋が運ぶ酒樽には「劍菱」の商標が明瞭に描かれているが、県図写本では判然としない。また、自筆本では薩摩藩主や嫡子の乗物（駕籠）の内部が細かく——花瓶に生けた花や器類まで——描写されている。その他、自筆本と県図写本が異なる点は、第一に自筆本には随所に金泥が使用されていることである（この金泥の使い方も今回出現した自筆本と鹿大原本との共通点と言える）。たとえば、巴紋の幕のある座敷で酒盛をする男たちの前に置かれている杯状の器、挟箱の金紋、鎗の金具などである。第二に県図写本では、文字（特に序



文)の読み仮名が省略されていること、また自筆本の行詰めや文字の配置を変えている、つまりは忠実に写していない部分があることである。自筆本が発見されたことにより、われわれは上月行敬の描いたものがよりよく理解できることになったのである。

一方、県図写本の作成者である新納榮(1907-95)は本絵巻を臨模したわけであるが、その段階では自筆本(本巻)は完全な状態であったはずである。それは県図写本が上記のように読み仮名の省略はあるものの、文字が欠けている部分が見られないためである。これに対し自筆本は、残念ながら虫損のために文字の欠落が随所(特に序文に多い)に存在する。県図写本は自筆本に欠けている部分を補うために貴重である。また、新納榮が自筆本をできる限り細部まで忠実に写そうとしていた努力の跡やその技量の高さは改めて評価されるべきであろう。

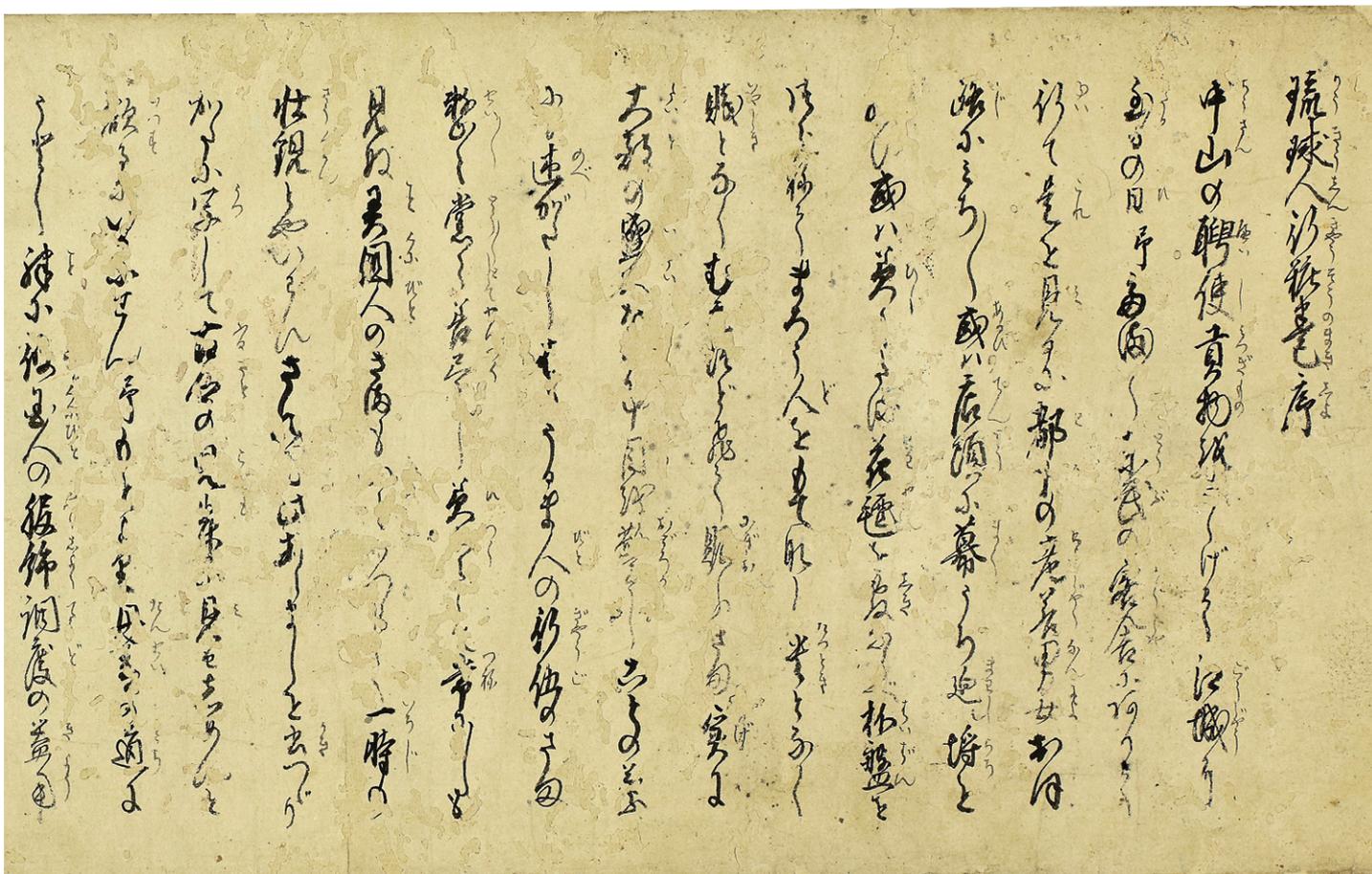
(付記)

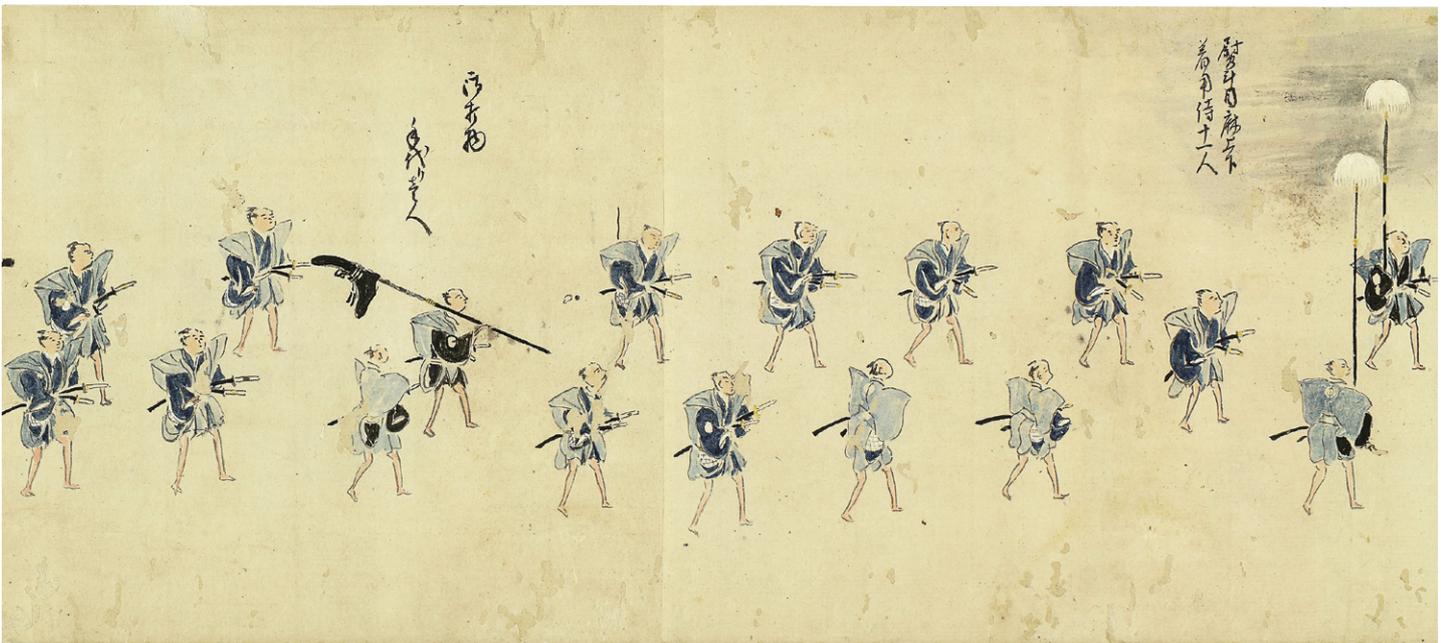
今回、本書に新出の自筆本1巻の紹介をすることができたことは、この上ない喜びである。ご協力いただいた株式会社思文閣には編者一同より深甚の感謝の意を捧げたい。

なお、本絵引は自筆本出現以前に入稿したため、自筆本によって新たに得られた知見は反映していない。この点、留意されたい。(丹羽謙治)



①





②



③







④



⑤



⑥





⑦



⑧



⑨